

画家は語る

サーカスと奇術

奇術とアクロバットに興味を持った最初は、6歳（1951年）くらいの頃に当時東北の田舎の疎開先に巡業にやってきた奇術師を見た時から。その奇術は、頭を日本髪に結び古風な着物を着た女が、手に持ったセンスの先や、日本髪の頭のとっぺんや指の先から自在に水を高く噴き上げる芸を見せてくれた。水道もなかった片田舎で、その奇術はものすごく新鮮で不思議で、その光景がずっと頭に残った。

同じ頃、東北に小さなサーカスもやってきた。今のサーカスからみればずっと単純で小規模な空中ブランコや曲馬（馬の背中に乗ってアクロバットをする）などだったが、怖さと興味と興奮でときどきしながら見た。

サーカスには、人間の肉体能力の限界と危険に挑戦するダイナミックな動きがある。同じくダイナミックであっても、優雅で軽やかで美しいバレエとは違っている。命の危険と隣り合わせたダイナミズムにサーカスの最大のおもしろさと美があると思う。

サーカスや曲芸、ピエロや仮面は戦前までの芸術家にとっては、尽きないインスピレーションの宝庫だった。しかし、沢山の他のエンターテインメントが出現した現代では、サーカスは戦前ほどに身近な存在ではなくなり、画家たちはサーカスを主題にしなくなってしまった。サーカスの高度に訓練された芸や、華やかな舞台の背後にみなぎるスリルと緊張感は、芸術そのものの真髄と呼応するものがあると思う。私はサーカスや曲芸のシーンを通して、「静止した一瞬の動き」、「不思議さ」、「緊張感」がかもす美を現代風な画面で復活させたいと願っている。

ピエロと仮面

ピエロに興味を持ったのは、やはり東北の田舎でサーカスを見た時。失敗ばかりでかき、観客の失笑と同情を買い、アイロニーを湛えたピエロは、私たち人間そのものの姿を戯画化している。そうしたピエロへの共感が、私にピエロを描かせる最大の動機となった。

顔を白く塗ることによって男女の差も分からなくなり、人格が消えてしまうおもしろさと不思議さにも惹かれるが、人間が化粧の下にもう一つの顔を隠し持つ不気味さ、変身して別の人間になれる不気味さにも惹かれる。

サーカスの情景やピエロ風の風貌の顔を描き始めたのは、約十五年くらい前からでその前まではピエロではなく、極端にデフォルメされた顔（ゆがんだ顔、異様に高く曲がった鼻、極端に小さい目など）を描いていた。美しく整った顔には、何も語りかけてくるものがない。現実から離れたゆがんだ顔を通して、かえって破調の美とか人間の特徴などを強調したかった。

だんだんに顔はピエロの顔に変わり、仮面をつけた顔も描かれるようになった。白く塗ったり仮面を被せたりすることで、生の感情を供えた「個」としてのモデルが消えて、一人の普遍的な人間のイメージを描こうと意図した。また、それは変身したい、昇華したいという人間の願望の現われでもある。そして見る人たちは、ある特定のモデルを見せられているという強要感や束縛から解放され、画面のピエロ風の人物たちに自分自身を投影したり、自由な想像力を働かせて彼らと交信したりすることが可能になる。

人物を描くときに一切モデルは使わない。私が描く人物は全部私の記憶や想像やイメージの中にだけ生きているだけである。現実にはサーカスに行ってスケッチしたり写真をとってそれをもとに描くこともしない。記憶を頼りにスケッチブックにスケッチし、想像の人物像をデフォルメして描き出す。モデルを

使うと、非常にリアルな作品を描きたくなり、象徴性や抽象性から遠ざかり、メッセージ性を持たせることが困難になる。イメージするモデルがいることが多いが、彼らを実際にスケッチしたり似せて描くことはしない。全て想像で描く。人物以外でも薔薇などの数少ないものを除いては、花や鳥、景色等全て想像で抽象化して描くよう心がけている。

作風について

私が最も惹かれるのは、中世やルネサンス時代の絵画。東洋の異文化圏で教育を受けた私が、子どものころからヨーロッパ文化を身近に感じていたのは不思議なことかも知れないが、それはヨーロッパ文化、歴史、地理に大きな興味を抱いていた父親の影響だと思う。幼い頃からヨーロッパ絵画の複製や本を見て育てられ、小学生のころから絵画教室に通っていつも絵を描いていた。また父方の伯父二人が洋画家だったこと、伯母が有名な作家だったことも、画家になる環境が自然に整っていたように思う。オランダに来てヨーロッパ文化にじかに触れてもっと深く知るようになると、実はヨーロッパ文化の最も大切な部分がルネサンスではなく、中世にあるということに気づいた。ローマ崩壊後のヨーロッパ各地で、種々な民族が自己の文化を作り上げたのが中世だから、その時代にこそヨーロッパの一番のエッセンスが凝縮されていると思う。その彼らが作り出したアイコン画や祭壇画、宗教画が私の作画のルーツとなったのは、オランダに来て接した古い中世絵画（イタリアも含む）に、草創期の作品が持つ新鮮さや敬虔さを感じ取ったからだ。

私の作風はヨーロッパ絵画との接触なくして生まれなかったが、私自身の東洋的なバックグラウンドとそれが融合し、さらに現代的な抽象性を加味して出来たのが私特有の画風だと思っている。かつて人々が教会で祭壇画や磔刑図を見て感動したように、私の作品を見た人が感動し、触発され、多くのことを考えるメッセージ性の高いものを描きたいと思っている。それが何かというと、現代社会で希薄になりつつある交流、人類愛、同情、相互理解、寛容といった基本的なものである。現代絵画が見失ってしまった「美」の再生も目指している。

テクニックと作品に隠されたシンボルについて

かつてはテンペラ、油絵の具等で描いていた。油彩は渴きが遅く混色のしかたが複雑なことから、現在はキャンバスにアクリル絵の具で描いている。日本での個展には大抵60点くらいを展示するので、個展がある年は多作になるが、だいたい年間20点くらい描いている。古い絵画のマチエール(絵肌)を出すため、キャンバスにはゲッソやモデリングペーストなどを塗って特殊な凹凸のある下地を作る。そこにアクリル絵の具で描くが、新しい絵の具の生々しさを和らげるためにわざと画面をナイフや釘で引っかけて削り、古めかしい感じを出したりすることもある。グラフィックで現代的な表現を盛り込み、斬新でだれもがまだ試みない作風を作りたいといつも意識して描いている。

制作に際し私がよく意識的に描くシンボルとして次のようなものがある。

- | | |
|------------|---|
| *人物群 | 描かれた人間同士のコミュニケーションと愛を象徴。
ピエロ、踊る人、奏楽の人などはある特定のモデルではなく、人間の普遍的な姿として描いてそれは見る人の投影、分身でもある。停止した動きの中に命の永遠性を表現している。 |
| *光の束 | 人生のハイライト。希望。しかし『一瞬のはかなさ』でもある。 |
| *花、果物 | うつろいやすい美。感情。命の繰り返し（再生）。 |
| *シャボン玉、グラス | 壊れ易さと再生力。はかなさ。 |
| *鳥 | 自由。希望。命の繰り返し、再生。 |
| *楽器、奏楽 | 陶酔。うつろいやすさ。 |
| *手、紙ふぶき | 救い、励まし。賛辞、賛嘆、はかなさ。 |

何点かの代表作品について

『白夜行』(1998年制作三連画)



『白夜行(Going in Summer Twilight)』(三連画)は、この前年に癌で亡くなった親友へのレクイエムとして描いた。彼女とは毎夏、長距離の自転車旅行に出かけた。最後の旅行に行った1996年7月ころ、彼女はすでに十年前に手術した癌が再発したのを自覚していた。自転車をこぐ彼女と私に向けて、白いあざみの綿が沢山飛んできた。私たちは途中で野の白い花を摘んだが、その時彼女が作ったのが

「野花いっぱい摘みて終わりぬ白夜行」

という俳句である。翌年1997年に彼女は他界したが、この作品はこの旅行の時のイメージを描いたもの。モデルはその友人で、ピエロの顔に仕立てることで悲しみの感情を昇華させ、不滅の命を象徴することで彼女へのレクイエムとした。

『姉妹』(2005年制作三連画)



2005年の代表作「姉妹(The Sisters)」(三連画)のモデルは私の姪の子どもたち二人で、彼女たちがまだ幼なかつた時代を思い浮かべ、それにかつて見たサーカスの光景をあわせて描いた。沢山の観客が見ている中で危なさそうにこわごわと一輪車に乗る二人に、これからの人生がこのように不安定で簡単ではないこと、その中で二人がいつまでも仲良く生きていって欲しいと言う私の願いをこめた。左右の画面から出ている手と薔薇、紙ふぶきはその彼女たちへの声援と賛辞である。

『月夜 - タンブリン』、『月夜 - ダンス』(2005年制作二連画)



『月夜 = タンブリン(Moonlit Night=Tambourine)』、『月夜 = ダンス(Moonlit Night=Dance)』(2005年作二連画)は、サーカス・シリーズの一環として描いた。二人あるいは三人の人間がいる画面を私はよく描くが、これは現代社会で徐々に希薄になりつつある人間同士のコミュニケーションを回復したいというメッセージでもある。踊るという共通の動作によって、二人の人間に連帯と交流が生じる。この画面では二人がタンブリンとフラフープで合わせて踊ることによって、二人の男女の強い絆と愛を表現した。遠景は生活を示唆する町と自然の風景、月は宇宙を、床のタイルの模様は生活空間を意味し、人間がはみ出ることができない厳しい現実を示唆して、人間社会の矛盾を描こうとした。また、顔にピエロの化粧を施すことによって、この二人がある特定の人物であるという枠を超えて、普遍的な人間であることを表現している。つまり私の画面に現れる人物たちは全て見る人の投影、分身であるとも言える。

《2010年1月、吉屋 敬》